

御遺文にあらわれたる下種思想（前號續）

武 田 海 正

2 末法時代に生れる人々

佛教では教祖釋尊の入滅から數へて二千年以後の世の中を末法と稱してゐる。末法とは五濁の惡世であつて人々皆諍ひを事とし佛教の中でも法華經を本意としない教は御利益がなくなると云ふ恐ろしい世の中である。時代は法華經の大白法廣宣流布の時代であるといふ立場から全人類を分類すると、法華經を信ずる人と、法華經を謗る人と、法華經を信じもしなければ謗りもしない人の三種になる。

漠然と法華經を信じた人といへば縁あつて法華經を見たり聞いたり讀んだりして信じてゐる人は誰でもその中に含まれるのであるが、宗乘として法華經を信ずる人といふ場合は特に聖人の教化にあひ、又は御遺文を見聞し、或はその門流信者の説教によつて法華經を如法に信ずる順縁の人々に限定される。この順縁の人々は法師品によると過去世に十萬億の佛を供養し、法華經弘通の大願を立て、自ら進んで人間と生れて來たのである。涌出品によればこの世で法華經を信じ法華經を弘める人は前世には本化地涌の菩薩であつたのである。地涌の菩薩として過去遠々劫の昔から

法華經を信じ、法華經を弘めて來たのであり、又この世に生れて來たのも法華經を信じ法華經を弘める爲に生れてきたのである。だから順縁の人々にとつては法華經を信じ法華經を弘めることは出世の本懐であり、生涯の目的であり、日々の生活の基調でもあるわけである。

法華經が有難いといふことをきいてねたんだり謗つたりする人は過去遠々劫の間、佛の覺りから遠い迷信邪教を信じてゐたからその熱情が今世に生れてきてもこびりついてゐて、その惡縁の爲に法華經をそしるのである。法華經の譬喩品によれば彼等は法華經をそしつた罪によつて一度は墮獄しなければならぬ。しかし不輕菩薩を惡口した人々が千劫の間、墮獄して再び法華經によつて救はれたやうに、いつかは必ず法華經によつて救はれるのである。それから次の法華經を信じもしなければ謗りもしない無宗教の連中は一番困りものである。彼等は縁なき衆生度し難しでどうしようもないのである。現今の社會にはこのどうしようもない連中が一番多いのではなからうか。

有史以來世界第一の寶典たる法華經をみもせず、きゝもせず、讀もせず、信じもしない不幸な人々が社會にあふれてゐるのだ。彼等は自らの運命をかこち、生活苦に喘いでその苦海からのがれようとしては又迷信邪教へはまりこんで行くのである。科學全盛時代といはれる今日なほ家相、人相、手相、墓相、日の吉凶七曜九星二十八宿、姓名判斷類似宗教などの迷信邪教が跳梁跋扈するのは彼等の懐がめあてなのである。彼等は法華經の太陽の光を背にして闇の中に色々な迷信の映畫をみせつけられて布著をしばられてゐるのに氣がつかない。たまに眞正の法華經の行者がゐてそれは迷信だからよせなどといふと、切角の信仰をぶちこわすといつてくつてかゝる。こゝが大事なところだ。見思未斷の凡夫元品の無明をおこすこれ始なり。これは日蓮の挑發によるといはれたのはこゝである。全々法華經に無關心では救はれない。わざ／＼法華經を謗らせて救ふといふのである。

信ぜずばせめてのことに謗れかし

よこれぬ衣のあらはれもせず

どうせ信じないのなら謗つた方がよい。謗ることによつて根本悪が發動する。根本の悪心とは元品の無明であるから、等覺の菩薩が妙覺位にのぼる時に始て斷ずる最後の迷ひである。その最後の根本の迷ひを挑發して斷破するのである。法華經を謗つた罪によつて一度は墮獄するであらう。しかしそのおかげで將來必ず法華經の爲に救はれるといふのはかういふわけである。

法を謗ればどうして墮獄するのであらう。それは法は本佛の心であり、智慧であり、生命だからである。また法は一切衆生を佛にする佛種だからである。そういふ尊貴無上の法を誹謗するから一番重罪人のおちる無間地獄へゆくのである。無間地獄などといふとそんなものはない。死んでから何があるものかなどといふ人があるかもしれない。しかしそんな人こそ未來を信じない。久遠の生命を信じない。恐ろしい謗法者の仲間なのである。

本當の法華經の信者なら本佛の實在を信じ、本佛は久遠の昔から、今なほ現に働き給ふことを信じ、本佛の心は法華經本門壽量品文底秘沈の一大秘法なることを信じ、一切衆生は法華經の久遠の生命を信じて作佛することを疑はない。

この久遠の生命を信じない者は自ら作佛できないばかりでなく、自分以外の一切の人間を成佛せしめないといふ大罪惡を作つてゐるのである。彼は久遠の生命を信じないから未來の存在を信じない。明日を信じない。未來を信じないから生きてゐるうちに思ふ存分享樂しようとする。自分さへよければ他人などはどうなつてもかまわん。今日さへうまく過ごせば明日などどうなつてもよい。私利私欲に走つて社會の爲など露程も考へない。さう云ふ人はどれくら

お他人へ迷惑をかけるかわからない。自分が悪道へ迷ひこむばかりでなく連の人を皆迷界へ誘惑する。自分が法華經を信じないばかりでなく他人へもすゝめて法華經をすてさせる。法華經は佛になる種である。その佛の種をすてれば誰も佛になる事はできない。だから法華經を誇るものは十界の佛種を斷滅する悪人であるといはれるのである。

取要抄云 末法に於ては大小權實顯密共に教のみあつて得道なし。一閻浮提みな謗法となりおわんぬ。逆縁の爲にはたゞ妙法蓮華經の五字に限る。例せば不輕品の如し。我が門弟は順縁、日本國は逆縁なり。(一〇四二)

本尊抄云 此の時地涌の菩薩、始めて世に出現し、たゞ妙法蓮華經の五字をもつて幼稚に服せしむ。因謗墮惡、必因得益とはこれなり。(九四七)

日向記云 我等衆生五百塵點の下種の珠を失ひて五道六道に輪廻し貧人となる。(五一)

當體義抄云 佛説云若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種乃至其人命終入阿鼻獄(九九九)

忘持經事云 久遠下種の人は良藥を忘れ五百塵點を送り、三途の嶮地に顛倒せり。(一三八四)

日向記云 此經を謗する者は十界の佛種を斷するなり(三五)

3 本 佛 背 反 の 大 衆

末法時代には法華經を信する者と、信じない者と、そのどちらにもつかない中間階級の者と三種類がある様であるけれども、久遠以來今日までの機類と比較すれば何れも最劣機の鈍根である。等しく久遠下種をうけてゐながら今日まで流轉してきたのであるから、さうほめたものではない。

正像時代の人を本已有善といひ、末法時代の人を本未有善といふ場合も末法の人本来下種がなかつたのだと解釋

してはならない。下種の有無によつて本已有善と本未有善を區別してはならぬ。本未有善といふのはたゞ過去に發心下種を被る程の善い因縁がなかつたのであつて、久遠の下種は十界平等に被つたのである。本因の下種は平等であつたが久遠の昔から今日までくる中間色々な惡因縁にたぶらかされたのである。その惡縁のおかげで長い間流轉をつゞけ遂に久遠下種も、あつたのかなかつたのかさへ忘れはてしまつたのである。だから機情の立場から本未有善といふのである。

下種を忘れ本心を失つてしまつたのは自ら好き好んで忘失したのではない。中間の強盛なる惡縁に迷はされて惡道におちたのである。その惡縁といふのは鎌倉時代には念佛、禪、眞言、律等の他宗であつた。今日は唯物思想と迷信邪教をさすのであるから、宗教家たる者は何をおいても教の邪正を明にしなければならぬ。災難と迫害は恐るゝに足らない。宗教家の最も恐るべきものは迷信邪教である。天災は現世だけであるが邪教の惡縁にあへば未來永恒惡道におちるからである。

自らよこしまにふる雨はあらじ

風こそ夜半のまどはうつらめ

久遠下種を忘れたり、十界の佛種を斷じたりする人はまた本佛背反の重罪を犯してゐるのである。謗法といつてもたゞ法だけを誹謗するものと思つてはならない。妙法は本佛のさとりの内容であるから、本佛の叡智であり、その慈悲の結晶である。さういふ本法を信じないのであるから、佛智を疑ふものであり、本佛に背くものであるといふのである。

佛の明智を疑ふのはその人に根本無明があるからである。無明とは佛の心を疑ふ根本の惡心である。佛の心は明る

い。光があふれてゐる。百千萬の日月よりも明るい、光明無量である。無明とはその反對で明るさがないのだからまづくらである。闇である。迷へる人の心は闇である。闇であるから佛の明智を疑ひ、佛の明智をそしる者は佛の大化にそむくことになるのであるから、本佛背反の罪におちるのである。

また佛の明智は普通、法の名によつてあらはされる。だから法は佛の内容であり、心であり、生命である。その法を疑ひ、その法をそしる者は佛の心に反し、佛の生命を傷つけるものでなくて何であらう。父本佛のいのちを斷つものは、子としては親殺しの重罪犯人でなければならぬ。

壽量品によれば失心、不失心の子供達はみな父に解毒濟を下さいとお願した。その請に應じて父は子供達へみな平等に父自ら慈愛の手で作つた良薬を興へたのである。然るに不失心の子はそれをのんだが失心の子はそれをのまなかつた。薬をのんだ子はみな病氣が癒つて元氣になつたが、のまなかつた連中は七轉八倒の苦みをつゞけてゐた。

してみると久遠の昔、全法界の人々はみんな佛の教化を懇請した。そこで佛はその請に應じて十界へ平等に妙覺の種子を興へたのであつた。それなのに惡縁にたぶらかされた人々はその久遠の下種を忘れてしまつて、無量劫の長い間、苦海に身を沈めてゐたのである。彼等は父の考へた良薬をのまなかつたのであるから、佛の心を疑ふものであり、佛にそむく不孝の子であるといはれてもしかたがない。かやうな佛智疑惑と、本佛背反の重罪によつて、末法の人々は久遠以來今日まで流轉をつゞけなければならなかつたのである。

開目抄云 久遠大通の者の三五の塵をふるは惡知識にあふゆへなり。(一八六)

忘持經事云 今の眞言宗、念佛宗、禪宗、律宗などの學者は佛陀の本意を忘れ失ひ、未來無數劫をへて阿鼻の火坑に沈淪せん。(一三八四)

御義云 無明とは疑惑謗法なり。(三九)

又、法華經は一切衆生の父なり。この父に背く故に流轉の凡夫となる。釋尊は一切衆生の父なり。この佛に背く故に備さに諸道をめぐるなり。(三九)

4 懺悔と自覺

私共の過去をたづねるならば佛にそむいたり、法をそしつたり、その外久遠以來今日まであらゆる罪惡をつみ重ねてきたに相違ない。五戒、十戒、五百戒などの無量の諸戒を破つた上に、無数の法華經をそしり、その行者を迫害してきたのであらう。こういう無始以來の罪障を數へるならば盡未際救はれさうもない、この罪人は一體どうしたら救はれるのであらうか。

さういふ常識で考へては救はれさうもない人間をすくふのが宗教である。その人間を救ふにはその人間と同じ様な身と心と境遇とを有しながら、その人間より以上の力を持つてゐなければならぬ。古來の宗教的人物はみな人間と生れてゐながら、我は神の使であるとか、我は神の子であるとか、我は佛の使であるとか、我は菩薩の生れかはりだとか宣言してゐる事によつても人間以上の力を必要とする事が明であらう。キリストは神の子であるといひ、マホメツトは神の使であるといひ、釋迦は本覺佛の應現であるといひ、天台は藥王菩薩の再誕であるといひ、宗祖は地涌の生れかはりであるといはれてゐる。

人間にはなやみと悶へがある。精神と肉體の矛盾になやみ、理想と現實の矛盾に心をいためない人があるだらうか。この靈肉の矛盾になやみ、理想と現實の矛盾を意識する心はまことに尊い心である。その心こそ現實的の肉體的の罪

を懺悔する心となり、また精神的の理想的の超人的實在者を求める心となるのである。たゞ一つの心が二方面へ同時に働き出すところに秘密がある。人間的な罪惡を知ればしる程、超人間的な力にたよりたい心がわいてくる。超人間的な力にたよる心はそのまゝ超人間的力の持主になりたいといふ意志活動へまで進んでゆくのである。日蓮聖人でも人性に對する省察が、自己にまで深められた時、自らの過去における謗法罪を懺悔しないでは居られなかつた。

滅罪抄に

過去の謗法我身にある事疑なし。此罪を今生に消さずば未來争でか地獄の苦をば免るべき (一〇一三)

佐渡御書に

日蓮またかく責らるゝも先業なきに非ず。不輕品云、其罪畢已等云云。不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈擲罵せられしも先業の所感なるべし。何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや。大天が神にもや。不輕々毀の流類か。失心の餘殘なるか。五千上慢の眷屬なるか。大通第三の餘流にもやあるらん。宿業はかりがたし。日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば今生に念佛者にて數年が間法華經の行者をみては未有一人得者千中無一等と笑ひし也。今謗法の醉さめてみれば酒に酔る者父母を打つて悦びしが醉さめて後歎しが如し。歎けどもかひなし。此罪消がたし。何に況んや過去の謗法の心中にそみけんをや。(八三〇)

開目抄に

我無始よりこのかた惡王と生れて法華經の行者の衣食田畠等を奮ひとりし事かづをしらず。當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒すが如し。又法華經の行者の頸を刎こと其數をしらず。今日蓮強盛に國土の謗法を責れば此の大難

の來るは過去の重罪の今生の護法に招出せるなるや（八一七）

等と懺悔されてゐるのにみても明かである。これが敬虔なる佛子としての態度なのではなからうか。

この謗法に對する反省と懺悔とは永遠に救はれる契機である。なぜかといへばその謗法を反省させるもの、懺悔させるものは久遠下種の本覺心だからである。すでに謗法の罪を懺悔してゐる人の意識には本覺心が働いてゐる。もし本覺心が働いてゐるとすればその人は謗法懺悔の當初すでに救はれてゐるのだ。それは長い過去の間には自分も法をそしつた事があるなあと反省する時にはもう久遠の生命を信じてゐるのだから、謗法懺悔の一刹那に本覺佛の體内へ攝取されるのである。はやその時は愚かな自分も本佛果海中に安住して、永遠不滅の生命につながつてゐるのだと覺ることができるのである。この自覺によつて罪惡の身が直ちに久種近脫の上機にのぼるのである。久種近脫とは久遠下種を被つて近世に脱益を得たる六萬恒沙の地涌の菩薩のことであるから、久種近脫の上機にのぼるといへば、何も知らない我等凡夫が自分も本化地涌の流類であつたと氣づいて自覺することである。

日蓮聖人はすでに青年時代にその大自覺に入つて居たのであつた。しかしその自覺發表にはあくまで用意周到であつた。精神的には自覺してゐても具體的に社會的に肉體的に體驗しないうちは發表しなかつた。承久亂の原因と八宗分裂の元意を材料に國家を諫曉し、建國の理想と如來出世の本懷經を右手に當時の上下萬人に向つて折伏聖戰の火蓋を切つた。忍難弘通の日はつゞいた。法華經の豫言は一一實現した。日蓮聖人は法華經の一一文々が自己によつて體現されつゝある事を信じて感涙にむせんだ。予この記文を拜して兩眼瀧の如く一身悦を徧す（一一二二）と叫んだ。

こゝに謗法の罪人は一躍して久遠の生命の中へ甦へり、我こそは地涌千界の上首上行の再誕であると何んの臆するところもなく宣言せられた。

實相抄云 地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人也。(九六〇)

賴基陳狀云 日蓮聖人は三界の主、一切衆生の父母、釋迦如來の御使、上行菩薩にて御座候。(一六一三)

報宗仲書云 斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰かと思食す。上行菩薩の再誕の人なるべし。(一九二五)

教行證御書云 已に地涌の大菩薩上行出させ給ぬ。結要の大法亦弘らせ給べし。(一一二五)

本化上行の自覺を有する人の唱へ出す題目の聲は世界人類を救濟する末法下種の天鼓の響となつて萬年の未來までもひびいてゆく。

5 地 涌 の 菩 薩

日蓮聖人の上行自覺こそは萬年救護の實證である。もし聖人が如來使の自覺にたつて開教しなかつたならば、末法の大衆は盡未際救ひの聲をきく事ができなかつたであらう。幸ひなるかな、佛使上行は再誕遊ばした。文底留種たる結要の大法は弘まつた。

この大法の力によつて流轉の凡夫は直ちに久種近脱の上機に騰る事ができるようになつた。罪惡のかたまりであつた苦の私共は今や永遠に救はれるのだ。この事實は末法の間一同が法華値遇の大縁を過去遠々劫の昔から結んであつた事を證するものでなくて何であらう。それではどんな善い因縁をつんだおかげで今日法華經の信者になつたのであらう。

經典によれば久遠の始に法華經の下種をうけてから今日まで地涌の菩薩として修行したり、十萬億の佛を供養したり諸佛のみ前で末法惡世に生れて法華經を弘めます。などと誓願をたてたりしてきたのである。この世に生れて法華

經を信する人々は過去の世の中では皆本化地涌の菩薩であつた。本化の菩薩といへば久遠の昔、本覺佛の教化にあつて妙法を修行し、すでに佛の位にあつたが本佛の行化をたすけるために壽量顯本の直前始めて菩薩となつて涌現せられた人々なのである。さういふ高貴の佛菩薩がこの末代の世を警醒せんが爲に自らすゝんで現代社會に人間と生れてくるのである。だから法華經の信者たる者は人生の目的は何ぞやなどと迷ふ必要はない。もう生れぬ前から人生の目的は確定してゐる。

法華經を信する程のものは老若男女の差別なくみな法華弘通の陣頭にたつて進まねばならぬ。その外に人生の目的はないのだ。

今現に法華經の信者なら誰でもその過去世は地涌の菩薩であつたにちがひない。地涌の菩薩であつたとすればその本地は皆日蓮聖人と同格でなければならぬ。してみると聖人が唱へる題目と同じ様に誰が唱へる題目でも末法下種となるわけである。それでよいのだらうか。

これは決して日蓮聖人を人間並に引き下ろしたものと考へてはならない。正しい信仰は人間を罪人に引きおろすところにあるのではない。人間が罪障のかたまりであるかの様にとくのは人間の本地は本來神であり、菩薩であり、佛であるといふ事をさとらせる爲に、まづ正しい信仰を得てゐない以前の自己を否定させる爲なのである。あなたの本地は地涌の菩薩であつたといふのは、あなたは法華經を信じなかつた以前の自分を強く反省し懺悔してゐるといふ見地からさういふのである。だからあなたは地涌の菩薩であるといふ事は日蓮聖人を人間並に引きおろした事を意味しないで、むしろ日蓮聖人と同じ地位に皆さんが昇つた事を意味するのである。丁度それは寶塔品の説法の時一會の大衆が釋迦多寶二佛並座の崇高なお姿を拜んで自分たちも空中へのぼりたいと思つた時、佛の神通力で靈山の大家一同

すうと空中へ引きあげられた様なものである。多寶如來の誓願によれば在世だけではなくて末法でもどこでも法華經をとくところには寶塔が涌现する事になつてゐる。末法の寶塔は久遠下種をさとつて、自分もあの地涌の菩薩の流類であつたと信仰をさゝげるところにあらはれる。寶塔はどこにある等とさがさなくともよい。やがて法華經を信する自分自身が寶塔であつたと氣づくであらう。自分の佛性は久滅度の多寶如來であつた。久滅度といふから久しい以前より眠つてゐたのである。それが今日玄題の響をきいて覺醒したのである。迷信邪教の癡醉劑をかゞせられて長い間眠らせてゐたのが、今はからずも妙法の良薬にあつて覺醒する事ができたのである。

實相抄云 日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩に定まりなば釋尊久遠の弟子たる事あに疑や。經云 我從久遠來教化是等衆とは是也。末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女は嫌ふべからず。皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目也。(九六一)

千日尼書云 法華經には過去に十萬億の佛を供養せる人こそ今生には退せぬとわみへて候(一七六〇)

阿佛房御書云 末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には寶塔なきなり。若然者貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と唱る者は我身寶塔にして我身又多寶如來也。(八二五)

かうした有難い自覺を得たならば今度はその法悦を他にわたかねばならない。自分が救はれると同時に他人をも救つてゆくが菩薩行である。自分さへ救はれよば他人はどうなつてもかまはないといふのでは菩薩ではない。それは聲聞か緣覺であらう。法華經の信者だと自らなる程の人は少なくとも地涌の自覺に達してゐる筈であるから菩薩行をしなければならぬ。菩薩行といへばたいへん六づかしいものゝ様であるが、末法の菩薩行はその形式は極めて簡易である。しかしその精神まで安直であると思つてはならない。その形式はたゞ題目を唱へるだけであるから三歳の子供

にもできる。しかしその精神は常に本覺佛の實在を信じて、あらゆる社會の人々を神と敬ひ佛と崇めてつきあつてゆかなければならないのであるから容易ではない。

その實踐的軌範は不輕品に説かれてゐる。不輕菩薩はどんなに恥かしめられても堪忍してその人々を一心に拜禮しつづけた。それだのに社會の人々は彼の不輕菩薩を杖でうち刀できらうとした。今だつて法華經の精神を本當に正直にとくならばきつと迫害がくるであらう。日蓮聖人の生涯は殆んど迫害史であつたではないか。どんな迫害がこようと法華經の精神を精神として題目を唱へてゆくのが私共の人生の目的である。たゞ題目を唱へただけでそれが自行となり、化他行となつてゐるのである。唱へられた題目は聲となつて他人の耳朶から入りその人の八識心田の中へ下種される。その覺種はその時すぐ芽をださんでもいつか必ず芽をふいて、その人の心の中から育ちあがり内部から自分の佛菩薩なる事をさとらせるであらう。この修行經過が末法下種といはれるものである。だから末法下種は始め日蓮聖人によつて唱導され、その教團人は男女を問はず皆實行しなければならぬ菩薩行なのである。又少しでも他人を教化する力があるならば一文一句でも法華經の有難度いわれを語らねばならない。それは法華經の信者たる者の勤めであり天職である。勤めといふよりも法華經を信すれば他人を教化する力量が自然にわいてきて弘めないでは居られなくなるのである。それは信仰の心の中にお釋迦様や日蓮聖人の魂が働いてゐるからである。信徒たる者はかうした有難度い心地に住してすみよき世界建設の爲に命がけて戦はねばならない。縦ひどんな迫害がきても退いてはならぬ。その迫害にまけて改宗したり、法華經の反對者と妥協したりするならば無間大城の底におちて出る時期は永久にこないであらう。だから法華經をそしめる者をつつけたならば容赦なくこれを折伏しなければならぬ。それがその人に對する最上の禮儀であり、最大の敬意を表した事になるのである。もしさうした事をしないで謗法者をもても黙認す

るならばそれこそ自他共に與同罪として墮獄しなければならぬのである。

御義云 南無妙法蓮華經は自行化他にわたるなり。(八二)

松野殿御返事云 過去の不輕菩薩は一切衆生に佛性あり。法華經を持たば必ず成佛すべし。彼を輕んじては佛を輕んずる事になるべしとて禮拜の行を立てさせ給ひし也。(一五二四)

經文の如くならば隨力演説もあるべきか。(一五三二)

秋元抄云 法華經の敵をみてせめ罵り國主にも申さず。人を恐れて默止するならば必無間大城に墮べし(一九三九)

6 末法 下種の種子

久遠下種已來の世々番々の種熟脱は今番の壽量品に來つて一まづ大團圓となつた。こゝで失心不失心の上根上機はみな脱益を得た。しかし余の失心者は今番靈山の教化にももれ、正像にももれて末法の未來まで流浪の旅をつづけた。この久遠の流浪者を救はんが爲に教主釋尊は遙かに末法を鑒み給ひ壽量文底に久遠の本種を留めておかれた。そうして速く末法の大衆を教化する爲にこの文底留種の一大秘法を神力品では四句の要法に結んで上行等の地涌菩薩に付屬せられたのである。

この一大秘法は本覺佛が無始久遠の昔證得せられた事行の南無妙法蓮華經である。この本法は單なる經典の名でもないし實相の理でもない。本佛久證の妙法であるから本佛の妙智であり妙慧であり無縁の慈悲である。いかに眞理運動が盛んに行れても人類救濟の妙法とはならない。眞理とは火が熱い。氷は冷たいといふ様なものでそれを活用しなければなんにもならない。その眞理を活用するところに價値があるのである。久證の本法はすでに本覺者が久遠の大

古宇宙の眞理を體得活用して價值としての妙法を久種とし、文底留種とし末法下種の要法とせられたのである。眞理そのまゝの理體なら毒藥の様なものである。その毒を調合して良藥とするのが良醫のつとめである。末法下種の覺種は本佛が久遠の始に大慈悲のみ手をもつて複製された是好良藥である。

久遠下種の種子は本佛久證の妙覺の種子であつた。久遠下種が妙覺種ならば三世十方の分身の諸佛の下種の法もみな一列平等に妙覺種でなければならぬ。經典にも十方佛土の中には唯一乘の法のみありとあるから、宇宙法界には妙法佛種より外には何もものもないのである。全法界の諸佛如來の下種法がみな妙覺種であるならばその諸佛についてある菩薩や神々の教法もみな悉く妙法一佛乘より外にはない筈である。迹佛迹化の教法さへ妙法一乘によつて統一されてゐるのだから本覺佛久遠の弟子たる本化の菩薩の行法が妙覺種である事はいふまでもないであらう。

末法下種は地涌の菩薩によつて行はれるのであるから、本化地涌の行法が妙覺種とすれば末法下種の要法は色もかはらぬ妙覺種でなければならぬ。かうしてみると久遠下種の種子と末法下種の種子は同じ一秘の覺種である。たゞ異なるところはその形式だけであつて法體は全同なのである。形式が異るといふのは久遠下種は本佛の久證そのまゝの覺種であるのに對して、末法下種のそれはその種子が久遠以來世々番々熟脫等の効果を收め、壽量文底留種となり、神力別付の要法となり、末法應現の日蓮聖人によつて弘宣せられたといふ教相上の相違である。

これによつてみれば本門脫益の本果と末法下種の本因佛種も形式的には違つてゐてもその法體は同一であるといはねばならない。それは今年と來年は時間的には違つてゐても米の種をまけば米が實り、豆をまけば豆が實る様なものである。種子と果實は同じものであるといふ事は佛因佛果の上でも同様である。たゞ在末相對した時に教相の上では文上文底の異りがあり、教益の上では種脫の相違があるといふだけである。要するに久遠の本法と、本門の脫益と、

末法下種の題目はその實體全く同じである。久遠中間末法の三世にわたつて本佛迹佛本化迹化の自行化他の一切の教法はみな同一本法の妙覺種によつて統一されるのである。

しからばその妙覺種とはいかなるものであらうかと云へば、その形式は極めて簡易なる南無妙法蓮華經の聲にすぎない。けれどもその内容は全法界のあらゆる行法を包含して一つも餘すところがない。

その妙題の聲をきいて信仰の心を起せばその人の心田に入つた一大秘法の妙覺種は自然に生長して三大秘法の妙行と進展する。これはその人の努力によるのではなくて題目そのものに本來具有してゐる如來秘密神通の力によるのである。一度でも玄題の聲が耳朶から心田にひびくと、その題目に性として具有してゐる神秘力によつてその人は心の内から自己の本覺心にめざめるのである。その本覺心に醒めた人は心に本覺佛の實在を信じ、口に題目を唱へ、身に菩薩行を行はないでは居られなくなる。さういふ正しい信仰者の心の中には生きた釋迦佛、生きた日蓮聖人の魂が入りかはり給ふて、その人の口唇をかりて唱へ出す題目なのであるから、一文不知の人々の唱へる題目でも末法下種の妙覺種となつて空中に地上にひろまつてゆくのである。

實相抄云 釋迦佛多寶佛、未來日本國の一切衆生のために留めおき給ふ處の妙法蓮華經也。(九六二)

日向記云 この題目の五字は五百塵點劫より已來證得し玉へる法體なり。(六四)

教行證御書云 本門の肝心壽量品の南無妙法蓮華經を以つて下種となす。(一一一五)

本尊抄云 久種を以つて下種となす。——在世の本門と末法の初とは一同の純圓なり。但し彼は脱此は種なり。

(九四二)

日向記云 三世の諸佛の業とは南無妙法蓮華經これなり。(五四)

實相抄云 日蓮もしや六萬恒沙の地涌の菩薩の眷屬にもやあるらん。南無妙法蓮華經と唱へて日本國の男女をみちびかんと思へばなり。(九六四)

最蓮房御返事云 我等末法濁世に生を大日本國にうけ忝も諸佛出世の本懷たる南無妙法蓮華經を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事これ偏に過去の宿習なるか(八三七)

【完】

對支布教と我徒の用意

結 城 瑞 光

佛 法 西 漸

月は西より出て東を照し、日は東より出て西を照す。佛法も又以て是の如し。正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く。妙樂云く、豈中國に法を失ふて之を四維に求るに非ず乎等云云……(顯佛未來記)

戰禍に護る人さへ無い支那の古寺の裡で、携行の御妙判を拜讀する時、佛法西漸の豫識は正に今實現するの時期ではあるまいかと全身を絞る様な感激が涌いてくるのである。

支那の佛法は已に亡んで仕舞つたと云つてもよい程無力なものになつてゐる。傳道を使命とすべき僧侶は、民衆の